

全国中学を終えて

東海大学付属第四高等学校中等部 嶋村圭太

2年連続で全国大会に出させていただき、結果は3位。昨年のベスト16を上回る成績で終わったことと、最終日まで残り銅メダルを頂けたことは大変嬉しく思います。しかし、やはり目標は優勝でしたので、悔しい思いの方が多いです。今年のチームの取り組みから、全国での戦いまでを振り返ることで、自分自身への「戒め」にもしようと思います。

<中体連まで>

毎年のように掲げている「全国制覇」という目標は、ただの夢ではなく、必ず達成しなければならない目標でした。昨年も全国大会を経験していること、当時の主力が多く残っていること、全国的に突出して強いチームがないこと、などを考えても、今年は特にチャンスだと思っていましたし、多くの関係者の方々からも「今年はいけるぞ。」と声をかけていただきました。

新人戦の各大会や春までの試合やそれにむけての練習では、特にファンダメンタルの徹底を意識しました。これは毎年変わらないことなのですが、昨年度の全国大会を経験して、さらなるファンダメンタルへの強い意識が必要だと感じたからです。特に要所での強いプレーを意識するために、強いミート、仕掛け、ステップ、ストップなど、ディフェンスではクロス・オーバーなどの切り返しの多いプレーへの対応など、細かい部分にさらに気を配りました。線は細い連中ですが、少しずつプレーに強さが生まれてくる実感はありました。

また、実践の中で道外のチームと対戦する機会があり、「北海道クラシック」での鳥屋野戦や、北海道カップでの試合、GWの春日部遠征での豊野(埼玉2位)戦などでは、特に全国レベルの強さを実感し、全国で勝っていくにはまだまだメンタル的な「隙」があることを感じました。

<中体連全市～全道>

中体連大会では今は札幌市予選から決勝リーグを除いてトーナメントであり、もう一度「負けたら終わり」だということを確認して臨みました。オフェンス面では安定していて、相手の様々なディフェンスの仕掛けにもある程度対応して勝つことができました。ただ、ディフェンスの緩さが課題に残りました。競り合った部分での粘りが見られなく、フルコートディフェンスも中途半端な状態でした。

全道大会では、ディフェンスに少し改善は見られましたが、試合によってムラがあり、集中力を欠く時間帯がありました。これは先ほど述べた「隙」そのもので、敢えてポジティブな言い方をすると、全国大会ではそのような試合(時間帯)は少しも許されない、ということを確認することができたと思います。

<全国大会に向けて>

全国大会に出てくるチームは、予選を勝ち抜くにあたって、必ず「強み」があります（高さ、プレスディフェンス、外角シュート、スーパースターなど…）。その強みでやられないためにも、相手の分析は重要です。そこで、今回もできる限りのスカウティングはしましたが、私自身の力がまだまだ足りず、情報も限られていましたし、実際対戦しても全く別の戦い方を仕掛けてくるかもしれないので、むしろ自分達の守り方に改めて目を向けて、相手のスタイルにしっかり合わせて守ることを意識して練習してきました。簡単に言うと、「対応力」です。今年のメンバーは特に、全体的にパスの出どころやカバーリングなどの予測に優れていたのも、きっと全国でも相手のストロングポイントをつぶすことができる力があると考えていました。具体的には、基本的にずっとマンツーマンで戦っていたので、相手のふところに入ることや、ディナイ（クローズ・オープン両方）、off ボールスクリーンの対応、ビッグマンに対しての効果的なつき方、などを確認したりしました。特にビッグマンに対しては、第四高校の佐々木先生から全日本時代に海外の選手と対峙していたときのつき方を細かく教えていただき、これが全国大会での大きい選手に対してのディフェンスに大いにつながりました。

全体的には期間が短いこともあり、確認程度のことしかできませんでしたが、大きなけがもなく大会本番に臨むことができました。

<全国大会>

全道大会から第四高校のトレーナーに依頼し、帯同していただきました。そのおかげで、体力的にも、精神的にもいいコンディションで試合に入ることができました。

・予選リーグ vs 横須賀学院（神奈川）

横須賀学院は春日部カップのときも来ていましたが、対戦することがなく、シュート力が高いチームという印象を持っていました。

序盤は固さがあったが、⑦白旗が好調でリード。前半はじわじわと点差を広げられそうだったが、相手⑩の 2 年生センターに要所でリバウンドをとられ思ったような点差が広げられず前半終了。後半も相手の巧く合わせるプレーに手を焼く時間帯が続いたが、終盤にようやく足が動いてきて「ディフェンスから速攻」というリズムができ、80-59 で勝利。一度流れがきてもそう簡単に離すことができない、全国ならではの難しさを改めて痛感。

・予選リーグ vs 玉川（滋賀）

大会屈指の高さを誇るチーム（スタメン平均身長 179.6cm、我々は 172.2cm）で、序盤から相手の高さに翻弄される。ビッグマン対策はしていたが、180cm 台が 2 人、192cm のセンターが 1 人と、計 3 人のビッグマンへの対応はさすがにできなく、ディフェンスをゾーンプレス〜ゾーンに変える。前線から果敢に仕掛けに行き、流れが変わってリードする。しかし、要所で離しきれないと、相手のアウトサイドシュートも入りだす。相手のゾーン

に怯える時間帯もあったが、最終的には④内田だけではなく、⑥中内と白旗が外中バランスを保ちながら、ドライブや飛び込みをしかけて突き放した。76-66。予選リーグを2勝し、なんとか1位通過することができた。自分達よりも数段高さのあるチームに勝利したことは、自信につながった。

・決勝トーナメント1回戦 vs 橋北（三重）

相手の情報があまりないまま臨むこととなり、出だしの動きを見て、素早く対応する必要があった。インサイドの選手がかなり粘り強くプレーしてくるチームで、前半は対応に困る。④内田にも徹底的にフェイスガードを仕掛けられ苦勞するが、道大会から同じようにマークされていたこともあり、ハイポストにうまく飛び込み、起点となった。結果的に後半突き放すことができ、さらに3年生8人を全員出場させ、8人全員得点という形で終わることができた。最後の⑨小笠原の道大会決勝に続くブザービーターには私自身もコーチという立場を一瞬だけ忘れ、心の中で深く感動した。3年生の頑張りで次の試合に向けていい流れを作ることができた。87-49。

・決勝トーナメント2回戦 vs 守山南（滋賀）

2回目の地元勢との試合でアウェイ感が大いに漂っていたが、こちらも同じ北海道代表の江別二中が敗れた相手ということで、スタッフ・選手ともにさらにモチベーションは上がるばかりでした。悔しい思いをしていたにもかかわらず、試合直後に二中の選手・スタッフともに試合戦っていたときの感触を教えていただき、大変感謝しています。北海道代表として絶対に負けられない戦いが始まりました。

こちらもサイズの大きな相手ということで、高さで押し込まれないようにすることが課題。ここでは⑮長澤が相手⑦のセンター(185cm)と「心中」、⑤新濱が相手④のガードに積極的にプレッシャーをかけて先手を取りに行き、オフェンスでは内田が絶好調で得点を量産。ウチにしては珍しく(?)好調な出だしとなる。大会前から意識していた、ディフェンスで相手の特徴をとらえながら対応することと、粘り強さが出せたベストゲームともいえる戦いで、最終的にはベンチメンバーが全員出場をすることができた。80-48。

・準決勝 vs 大石（埼玉）

ついに最終日まで残ることができ、相手は大石中。昨年の正月に埼玉の「ガウチョーズカップ」に参加させていただいた時に、大会の次の日にもわざわざ練習試合の相手をして下さった相手。全国準決勝という舞台で再び会うことができ、光栄でした。相手の印象としては非常に抜け目のないチームで、「全員が」よく走る、大変やりにくいチームでした。

序盤は相手にリードを許すが、こちらは悪いながらも内田のシュートでしのぐ。2ピリでこちらのオフェンスのバランスが良くなり、プレスダウンにも慣れてきてアウトナンバーを確実に決めることができ、前半5点リードで終了。ハーフタイムには、流れは変化して相手のシュートが後半入る時間帯が必ず来ること（逆に我々のシュートがそのまま入り続けるとは限らないこと）を確認し、後半に入る。

後半に入ってもリードは保つどころか広げるが、相手が徐々にこちらのディフェンスを

うまく外しはじめ、ノーマークのミドルシュートを確実に決められて点差を縮められ 3 ピリ終了。今思えばここでのクォータータイムで、序盤からのあたりの強いディフェンスがボディブローのように効き、肉体的・体力的というよりは精神的な疲れが選手に来ていたように感じます。私自身がそこを感じ取れず、変化を持たせないまま（あと 8 分もあるのに「逃げきる」意識が働きすぎた？）、4 ピリに入りってしまったことを猛省しています。4 ピリは一度つかんだ流れは必ず渡さない大石中の強さを見せつけられる。貯めていたタイムアウトを取り、選手を鼓舞しても、なかなか引き戻せない苦しさが漂い、リードしていたことが嘘のように逆転を許す。こちらにもリスクを背負ってディフェンスをオールコート・マンツーマンプレスに変えるも、シュートがリングに嫌われ万事休す。あと一歩でつかみかけた勝利を逃してしまう結果となった。57-61。

<終わりに>

あと 2 つの勝利で夢と現実がつながれるはずでしたが、本気で狙っていた分、それを実現できなくて、期待できる選手達を指導している者として責任を痛感しています。本当の本当に大事な局面で自分達らしさを見失わないで発揮するためにも、私自身が大事な局面をしっかりと乗り越える準備・覚悟が改めて必要だと猛省しました。課題を挙げたらきりがないですが、選手のおかげで全国の熱い舞台で 5 試合もさせてもらったことに感謝し、ポジティブにまた新チームで頑張っていく所存です。今後はまず「試合の流れを引き寄せる（悪い流れを断ち切る）プレーや戦術、選手起用」「選手・指導者ともに苦しい場面を乗り切るメンタリティーやそれを裏付けする様々なシチュエーションに対応できる準備」などを中心に考えていくつもりです。

今回の大会を戦い抜くに当たってご支援・ご協力いただいたスタッフ・保護者の皆様、道内外全ての大会に携わってくださった生徒・関係者の皆様に感謝申し上げて、大会の報告とさせていただきます。ありがとうございました。